

イライジャ - ナンバー・ファイブ

預言的沈黙

Jeff Pippenger

2023-10-03

エリヤがアハブに命じて全イスラエルをカルメル山に召集させたとき、それは、神が三年半にわたる迫害ののちに1798年に教会を暗黒時代から導き出し、教会を1844年へ、さらにその後1863年へと導くことを予表していた。これら三つの日付は、イザヤ書第七章で示されている「七つの時」の構造における最後の三つの道しるべである。

1798年、1844年、1863年の同じ歴史は、モーセがイスラエルの民をエジプトの奴隷状態から導き出してシナイ山へと導いたときにも予型として示されていた。第一と第二の天使の歴史は、終わりの時である1798年に始まり、1863年にその運動が教会となるまで続いたミラー派の運動を表している。エリヤとモーセはミラー派の歴史における二人の主要な証人であり、彼らはまた、第三の天使の歴史において黙示録に現れる二人の主要な証人でもある。

ミラー派運動は、ヨハネの黙示録第14章の「永遠の福音」の始まりを示し、フューチャー・フォー・アメリカはその終わりを示す。その始まりであるミラー派運動とその終わりの運動との間に、セブンスデー・アドベンチスト教会がある。アドベンチスト教会の歴史家によれば、1856年にミラー派運動の残りの民はラオデキヤの状態に入った。これにより、1798年から1856年に相当するフィラデルフィア時代は終わった。

前回の記事では、紅海渡渉の際の失望が、啓示の導きのもとで1844年の大失望と対応づけられていることを示した。その時点で、モーセの歴史において、マナによって象徴される安息日の試験が到来した。同じ預言的時点に、海を渡り、信仰によって至聖所に入った者たちに対して、至聖所から発した光が、安息日から始まる試験と清めの過程を開始した。1844年に先立つ試験の過程は、モーセの歴史では彼の誕生時に始まり、ミラー派にとっては、ダニエルが示した知識の増加とともに1798年に始まった。この知識の増加は、裁きへと至る三段階の試験過程を生み出すものであった。

多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者はいない。だが、知恵ある者は悟る。ダニエル書 12:10

1844年10月22日の審判の開始は、エジプトの長子に始まり、紅海の水の中で終わったファラオへの裁きによって型として示されていた。賢い者たちが信仰によって至聖所に入り、すなわち紅海を渡ったとき、1798年の終わりの時に始まっていた試練の過程は1844年以降も続いた。モーセの歴史では、それは十の試練として表され、イスラエルはその都度ことごとく失敗した。十の試練の最後は、十二人の斥候が約束の地を偵察したときであった。モーセの歴史における最初の試練は安息日を表すマナの試練であり、ミラー派にとっても、安息日は1844年10月22日以降の第一の試練と認識された。二つの歴史で第一の試練が安息日であることから、モーセの歴史におけるその後の九つの試練は、1844年以降に、約束の地に入るか、それとも死の荒野へと向かうかへと導く一連の試練が続くことを

示している。1863年はミラー派運動にとって最後の試練を表す。私たちは、十二人の斥候が約束の地の報告を携えて戻ってくる場面から、この考察を始める。

そして彼らは四十日の後、その地の偵察から帰って来た。彼らはモーセとアロン、そしてイスラエルの子らの全会衆のもと、パランの荒野のカデシュに来て、彼らと全会衆に報告を持ち帰り、その地の実りを見せた。彼らは彼に告げて言った。「あなたが私たちを遣わした地に来ました。確かにそこは乳と蜜の流れる地です。これがその実りです。ただし、その地に住む民は強く、町々は城壁に囲まれ、非常に大きく、そのうえ、そこでアナクの子孫を見ました。アマレク人は南の地に住み、ヘテ人、エブス人、エモリ人は山地に住み、カナン人は海辺とヨルダンの沿岸に住んでいます。」そこでカレブはモーセの前で民を静めて言った。「直ちに上って行き、それを占領しよう。必ずそれに打ち勝てるからだ。」しかし彼とともに上って行った者たちは言った。「私たちはあの民に対して上って行くことはできない。彼らは私たちよりも強いからだ。」彼らは自分たちが偵察したその地について、イスラエルの子らに悪い報告をもたらして言った。「私たちが通って偵察した地は、その住民を食い尽くす地であり、そこで見た民は皆、背の高い者たちであった。そこでは巨人、すなわち巨人の一族であるアナクの子孫を見た。私たちの目には自分たちはいなごのように見え、彼らの目にもそのように見えた。」民数記 13:25-33

民数記のこの箇所には、そこに表された歴史をミラー派運動の予表として考えないと見落とされがちな、注意すべき非常に重要な真理がいくつかある。一つの要点は、「悪い報告」をもたらした反逆者たちが第十にして最後の試みに失敗していたということであり、その最後の試みにおいて二つの陣営が顕れたという点である。先の九つの試みの歴史を通して形成されてきたこの二つの陣営は、どちらの「報告」を受け入れるかに基づいてその品性を現した。1863年、ミラー派アドベンチズムは、レビ記二十六章における奴隷に関する預言によって表されているモーセの報告を拒絶した。ヨシュアとカレブが提示した報告は、彼らが奴隷状態から解放されるという歴史全体を通じての神の「報告」の単なる繰り返しにすぎなかった。モーセの誕生以来、神は彼らを奴隷状態から連れ出し、何世紀も前にアブラハムに約束された地へ導き入れると約束してこられた。ヨシュアとカレブはその土台となる報告の上に立った者たちを代表し、他の十人の斥候は、神が実際にその報告を与えたのだということを否定した。

会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣いた。イスラエルの人々は皆、モーセとアロンに向かってつぶやき、全会衆は彼らに言った。「私たちはエジプトの地で死んでいたらよかったのに。いや、この荒野で死んでいたらよかったのに。なぜ主は私たちをこの地に導き入れて、剣に倒れさせ、私たちの妻や子どもたちを餌食にされるのか。エジプトに帰ったほうがよいのではないか。」そして彼らは互いに言った。「かしらを立てて、エジプトに帰ろう。」民数記 14:1-4.

1863年、James WhiteがReview and Herald誌において「七つの時」に関するMillerの理解を退ける記事を書き、同じ年にUriah Smithがレビ記の「七つの時」への言及を一切欠いた偽物の図表を公表したとき、WhiteとSmithはともにWilliam Millerの働きを退け、背教的プロテスタント主義の聖書解釈の方法論を採用した。彼らが最近「バビロンの娘たち」として特定していた背教者たちの方法論が、天使ガブリエルに導かれていたMillerのメッセージを退ける論拠として用いられた。古代イスラエルに対する第十の試練におい

て、彼らははっきりと「指導者を立てて、エジプトに帰ろう」と言った。第十にして最後の試練での失敗は、当初からの報告と一致していた「報告」を拒否したこと、そしてエジプトの奴隷状態に戻りたいという欲望に基づいている。1843年の予言の不成就に失望した者たちをエレミヤが象徴的に代表したとき、神は彼に、神ご自身とそのメッセージに対する以前の熱心さに立ち返るように特別に呼びかけ、また、バビロンの娘たちと特定されていた者たちのもとへ二度と戻らないよう命じた。

それゆえ、主はこう言われる。「もしあなたが立ち帰るなら、わたしはあなたを再び連れ戻し、あなたはわたしの前に立つであろう。もしあなたが卑しいものから尊いものをより分けるなら、あなたはわたしの口のようになる。彼らはあなたのもとに立ち帰るがよい。しかし、あなたは彼らのもとへは戻ってはならない。」エレミヤ書15章19節

1863年、ジェームズ・ホワイトとユライア・スミスは、彼らを行ってはならないと命じられていた場所へ連れ戻すための新しい指導者を任命した。ヨシュアとカレブは前進を望んだ者たちを、ホワイトとスミスは引き返すことを望んだ者たちを代表している。

民数記の該当箇所を留意すべきもう一つの点は、反逆者すべてが今後四十年の間に荒野で死ぬと宣告されたあの最後の反逆が、聖書預言の「一日を一年に当てる」原則を確立する二つの主要な根拠の一つである、ということである。この原則は、ミラーが永遠の福音と第一の御使いのメッセージを解き明かすために用いた、恐らく最も不可欠な預言解釈の規則であった。もう一つの聖書的証言はエゼキエル書に見いだされる。

それらを終えたなら、再び右の脇腹を下にして横たわれ。あなたは四十日の間、ユダの家の咎を負わなければならない。わたしはあなたに、一日を一年にあてて定めた。エゼキエル書 4:6

一日を一年とする原則を確立した二つの聖句について、しばしば見落とされがちなのは、両聖句の歴史的背景である。

あなたがたがその地を偵察した日の数に応じて、すなわち四十日、一日を一年に数えて、あなたがたは自分の咎を負うであろう。すなわち四十年。そして、あなたがたはわたしの約束違反を知るであろう。民数記 14:34

民数記のその箇所は古代イスラエルの初期のもので、神の契約の民の反逆を示し、エゼキエル書のその箇所は古代イスラエルの終わりの時期のもので、やはり神の契約の民の反逆を示している。初めの罰は荒野での死であり、終わりの罰は敵の地での奴隷状態であった。「一日を一年に」という原則は、契約の民の反逆を強調している。二つの罰があり、一つは初めに、一つは終わりに下ったが、内容は異なる。最初は荒野を旅するあいだに人々が次々と死ぬことであり、最後は文字どおりのバビロンでの捕囚と奴隷状態であった。

すると、モーセとアロンは、イスラエルの人々の会衆全体の前で顔を地に伏せた。ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブ、すなわち、その地を探った者たちのうちにいた二人は、衣を引き裂き、イスラエルの人々の全会衆に向かって言った。「私たちが通って探ったこの地は、きわめて良い地だ。もし主が私たちを喜ばれるなら、私たち

をこの地に導き入れ、それを私たちにお与えくださる。乳と蜜の流れる地である。ただ、主に逆らってはならない。また、この地の民を恐れてはならない。彼らは私たちの餌食だ。彼らの守りは彼らから離れ、主は私たちと共におられる。彼らを恐れるな。」しかし会衆全体は、彼らを石で打ち殺そうと言い出した。そのとき、主の栄光が、イスラエルの子らすべての前で、会見の天幕に現れた。主はモーセに言われた。「この民はいつまでわたしを怒らせるのか。わたしが彼らの中で数々のしるしを行ったのに、いつまでわたしを信じないのか。わたしは疫病で彼らを打ち、彼らを退け、あなたから彼らよりも大きく、強い国民を起こそう。」モーセは主に申し上げた。「それでは、エジプト人がこれを聞くでしょう。あなたが御力をもってこの民を彼らの中から導き上げられたのですから。そして彼らはこの地の住民にそれを告げるでしょう。主よ、あなたがこの民のただ中におられ、あなたご自身が顔と顔を合わせるようにして現れ、あなたの雲が彼らの上にとどまり、昼は雲の柱、夜は火の柱となって、彼らの先に立って行かれると、彼らは聞いているのです。今、もしあなたがこの民を皆、一人のように打ち殺されるなら、あなたの名声を聞いている諸国の民はこう言うでしょう。『主は、この民に誓われた地に彼らを導き入れることができなかつたので、荒野で彼らを殺したのだ』と。どうか、あなたが仰せになったとおり、『主は忍耐強く、豊かな恵みを持ち、咎と背きを赦される。しかし、罪ある者を決して無罪とはされず、父祖の咎を子らに、三代、四代にまで及ぼされる』という、そのとおりに、わが主の力を大いに現してください。どうか、あなたの大きい憐れみに従って、この民の咎をお赦しください。あなたがエジプト以来、今日までこの民を赦してこられたように。」民数記 14:5-19

これらの聖句に表されている歴史は、「挑発の日」と呼ばれる聖書における象徴となった。「挑発の日」は詩篇九十五篇、エレミヤ書三十二章、ヘブル人への手紙三章で言及されているが、今はその象徴には触れない。前の箇所で示された重要な原則があり、それを認識する必要がある。その原則はまた、預言者サムエル、ルシファー、エレン・ホワイト、そしてもちろん、この箇所におけるモーセによっても例示されている。

彼らは彼に言った、「ご覧ください、あなたは年をとり、あなたの息子たちはあなたの道に歩いていません。今、すべての国々のように、私たちをさばく王を私たちのために立ててください。」しかし、「私たちをさばく王を与えてください」と彼らが言ったこのことはサムエルの気に入らなかつた。サムエルは主に祈った。主はサムエルに言われた、「民があなたに言うすべてのことに聞き従え。彼らが退けたのはあなたではなく、彼らの上に私が治めることを退けたのだ。私が彼らをエジプトから連れ上げた日から今日に至るまで、彼らが行ってきたすべてのわざ、すなわち私を捨ててほかの神々に仕えてきたとおりに、そのとおりに、彼らはあなたにもしているのだ。今ゆえに、彼らの声に聞き従え。ただし彼らに厳かに警告し、彼らの上に君臨する王がどのように振る舞うかを知らせよ。」サムエルは、王を求めた民に、主の言葉のすべてを告げた。彼は言った、「あなたがたの上に君臨する王のすることはこうだ。彼はあなたがたの息子たちを取り、自分のために、戦車のために、また騎兵として任命し、そのうちの者たちは彼の戦車の前を走るようにする。彼はまた、自分のために千人の長や五十人の長を任命し、彼の畑を耕させ、収穫を刈り入れさせ、戦の武具や戦車の用具を作らせる。彼はあなたがたの娘たちを取り、香料を作る者、料理人、パンを焼く者にする。彼はあなたがたの畑やぶどう畑やオリーブ園、最も良いものさえ取り上げ

、それを自分のしもべたちに与える。彼はあなたがたの穀物とぶどう畑の収穫の十分の一を取り、それを自分の役人やしもべたちに与える。彼はあなたがたの男のしもべや女のしもべ、最も優れた若者たち、そしてろばを取り上げ、彼の仕事に使う。彼はあなたがたの羊の十分の一を取り、あなたがたは彼のしもべとなる。その日、あなたがたは自分たちのために選んだその王のゆえに叫ぶであろう。しかしその日、主はあなたがたの声を聞いてはくださらない。」それでも民はサムエルの言うことに聞き従うことを拒み、こう言った。「いいえ、私たちの上には王がいなければなりません。そうすれば、私たちもすべての国々のようになり、私たちの王が私たちをさばき、私たちの先頭に出て、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。」サムエルは民の言葉のすべてを聞き、それを主に語り告げた。主はサムエルに言われた、「彼らの声に聞き従い、彼らのために王を立てよ。」サムエルはイスラエルの人々に言った。「各自、自分の町に帰りなさい。」サムエル記第一 8:5-22。

この箇所では古代イスラエルは神を自らの王として退け、歴史は彼らが「カエサルのほかには王はない」と宣言した時へと指し示している。彼らは神の神権統治を拒み、自分たちの民の中から王を与えるよう強く主張したが、結局は自分たちの王はローマの王だと宣言するに至った。終わりの時代におけるローマの王はローマ教皇である。

しかし、彼らは叫んだ。「彼を連れ去れ、連れ去れ。十字架につけろ。」ピラトは彼らに言った。「あなたがたの王を、私が十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた。「私たちにカエサルのほかに王はありません。」ヨハネ 19:15

神権政治の拒否はサムエルにとってあまりにも侮辱的で個人的な出来事だったので、彼はそれを自分の預言職の拒絶だと受け取った。だが神は、彼らの拒絶が預言者ではなく神ご自身に向けられたものであることを、サムエルに悟らせた。古代イスラエルの反逆に対するモーセとサムエルの預言的関わりを示すこれら二つの箇所において、続く反逆への懲罰は古代イスラエルの終わりではなかった。約束の地に入ることになる人々の群れはなおヨシュアとカレブに代表されて残っており、またサムエルの物語では、古代イスラエルの終焉はイスラエルの王たちの時代の終わりであって、その始まりではなかった。

モーセは、神に対して、古代イスラエルへの働きを続けてくださるよう、理を尽くして願い求めた。というのも、彼は、その時点で彼らに終止符を打つことは、神がその民を救い出してこられた聖なる歴史と、神がアブラハムに約束した地へ彼らを導くという約束を誤って伝えることになると考えたからである。ここでの要点は、神が反逆を真理の証しとして用いるおつもりのときには、その反逆が起こり、また続くことも、あえてお許しになるということである。

サムエルが示した義憤の態度は、エレン・ホワイトにも見られた。

私は、ミネアポリスで表れたような、これほど確固たる自己満足と、光を受け入れ認めようとしないうる心を、私たちの民の間にかつて見たことがありませんでした。私は、あの集会で示された精神を大事にした一団のうちのだれひとりとして、彼らが高ぶりを捨ててへりくだり、神の御霊に動かされていたのではなく、むしろ思いと心が偏見で満ちていたのだと告白するまで、天から彼らに送られた真理の尊さを見分ける明確な光を再び持つことはない、と示されました。主は彼らに近づいて彼らを祝福し、彼らの退転をいやすことを望まれましたが、彼らは聞き入れませんでした。彼らは、コ

ラ、ダタン、アビラムを駆り立てたのと同じ精神によって動かされていました。イスラエルのあの人々は、自分たちが誤っていることを証明するあらゆる証拠に逆らうことを固く決め、多くの者が引き込まれて彼らに合流するまで、離反の道を歩み続けました。

彼らは何者であったのか。弱い者ではない。無知な者でも、悟りのない者でもない。あの反逆には、会衆の間で名高いつかさが二百五十人、すなわち名だたる男たちが加わっていた。彼らの主張は何であったか。『会衆は皆、ひとりひとりが聖であり、主は彼らのただ中におられる。それなのに、なぜあなたがたは主の会衆の上に自らを高くするのか。』[Numbers 16:3] コラとその仲間が神の裁きのもとに滅ぼされたとき、彼らに欺かれていた人々は、この奇跡に主の御手を見なかった。翌朝、会衆全体はモーセとアロンを非難して、『あなたがたは主の民を殺した』[verse 41]と言い、疫病が会衆に臨み、一万四千人を超える者が滅んだ。

ミネアポリスを去ろうと決めたとき、主の使いが私のそばに立って言った。「そうしてはならない。神はこの場所であなたに果たすべき働きをお与えになっている。民は、コラ、ダタン、アビラムの反逆を繰り返している。私はあなたをしかるべき位置に置いたが、光の中にいない者たちはそれを認めない。彼らはあなたの証しに耳を貸さない。しかし、私はあなたとともにいる。わたしの恵みと力があなたを支える。彼らが悔っているのはあなたではなく、わたしがわたしの民に送っている使者とそのメッセージである。彼らは主のことばを侮ってきた。サタンが彼らの目をくらませ、判断をゆがめた。そして、神の霊を侮辱しているこの聖別されていない独立心という罪を、一人ひとりが悔い改めないなら、彼らは暗やみの中を歩むであろう。彼らが悔い改めて立ち返り、わたしが彼らをいやすことができるようにならないなら、わたしは燭台をその場所から取り除く。彼らは霊的な視力を曇らせた。彼らは神がご自身の霊と力を現されることを望まない。というのは、彼らはわたしのことばをあざけり、嫌悪する霊を持っているからである。軽薄、戯れ、冗談や冷やかしが日々行われている。彼らは心を定めてわたしを求めてはいない。彼らは自分で焚きつけた火花の中を歩んでいる。悔い改めなければ、悲しみのうちに横たわることになる。主はこう言われる。務めの持ち場に立て。わたしはあなたとともにいる。あなたを離れず、あなたを捨てない。」私はこの神からのことばを、あえて無視することはできなかった。『1888年資料』1067。

ホワイト姉妹はサムエルの態度にならい、反逆者たちとその反逆のただ中にとどまり、「義務」の「持ち場」に「立て」と告げられた。彼女（この女預言者）が反逆者たちとその反逆を彼ら自身に委ねて立ち去ることを決意した後で、彼女は自らの持ち場を守るよう命じられた。

アルファとオメガの原則の主要な構成要素である初出の法則は、ある主題が最初に言及されるときが至上の重要性を持つことを示している。ルシファーの反逆のまさに始まりに関連しているのは、もし神が望まれたなら、ルシファーの心に最初に芽生えた利己的な思いの時点で、神にはルシファーを排除するのに必要なあらゆる力があっただけという事実である。神は創造界からルシファーを取り除くことができたし、もしそうすることをお選びになっていたなら、他の天使たちが何が起こったのかさえ知り得なかったようなかたちでそれを行う力をお持ちであった。もちろん、神はそうはなさらなかった。というのも、ほかならぬ御自身の御品性を否定することになったからである。しかし、神はまさにそ

れを可能にする創造的な力を備えておられる。けれども神はそれをなさらなかった。神は忍耐をもって、その反逆が御自身の御品性の証しの一部となり、天で始まり最終的に地上にも及ぶことになる論争の証言の一部となることをお許しになった。これこそが、古代イスラエルに対してモーセの対話が成し遂げたことである。神は反逆の世代が荒野で死に絶えることをお許しになり、その歴史を聖書的な例として用いて、永遠の福音に関わる真理をさらに推し進められた。

同様に、サムエルの時代に人々が神の王権を退けたことについても同じである。サムエルは、自身の個人的な確信や預言的知識がどうであれ、先に進んで与えられた務めの持ち場に立つように指示された。このような神の預言的・歴史的な導きと監督は、バビロン捕囚後の神殿再建にも認められる。神は七十年に及ぶ捕囚のすべての要素を予告し、支配された。すなわち、エルサレムへの帰還、エルサレムの再建、神殿、そして街路と城壁に至るまでである。神は、彼らがいつ捕囚から解放されるかを示す時の預言を示された。二千三百年の始まりを画するために、いくつの勅令が出されるかも示された。最初の勅令によってその過程を始める異邦の王キュロスに、神は名指しで示された。エルサレムと神殿の再建に関わるすべての要素は具体的に示され、神はその業を成し遂げるために正しい人々と預言者たちを起こされた。

明白な神の預言的先見と介入があつたにもかかわらず、バビロン捕囚を招いた反逆は、神の民と共にある神ご自身の直接のご臨在にすでに終止符を打っていた。シェキナの栄光は、再建された神殿に戻ることは決してなかった。神殿が再び至聖所におけるシェキナの臨在に祝福されることはなかったが、その全歴史は、世の終わりの歴史に予言的な構造を与えるために用いられた。その意味で、再建された神殿は神の臨在の証しではなく、イスラエルの反逆の証しであつた。それでも、その時代の預言者たちは、サムエルやミネアポリスにおけるホワイト夫人のように、預言者としての務めを果たし続けた。

ルシファールの反逆は、キリストとサタンとの間の大いなる論争において最初に言及される事柄であり、神はご自身の目的のためにその反逆が続くことをお許しになった。サムエルは、ほかの国々のようにになりたいというイスラエルの願いに対する義憤にもかかわらず、最初の二人の王に油を注ぐ務めに携わるよう命じられた。そして神の預言者たちは、神殿の再建に携わつたが、その神殿にはもはや二度と神のシェキナーの臨在は宿らなかつた。

1863年のアドベンチズムの反逆を覆い隠そうとして、預言の言葉に対して自分たちの「作り話のご馳走」を並べ立て、さらに、1863年に何か誤つたことが起きていたのなら女預言者がそれを禁じたはずだという論理を自説の拠り所とする者たちは、神への反逆が最初に言及されたときに示された第一原則を故意に無視している。神はご自身の目的のために反逆をお許しになり、起こり得る反逆に際して預言者たちを中立または沈黙のままにしておくことをお選びになるのであれば、それは神ご自身の選択である。

1844年から1863年にかけての試練の過程、すなわち紅海を渡った後に古代イスラエルが失敗した十の試練によって型取られてきたとされる過程を考え始めるにあたり、この聖書的事実を理解することが不可欠である。神の預言者は、従順の時にも不従順の時にも、神の預言者として働き、表面的には預言者なら当然抗議すべきと思われる事柄について

も、時に抗議しないことがある。彼らは反逆を明らかに承知しながら抑えられていることもあれば、その反逆に関して主が彼らの目に御手を置き、見えないようにされることもある。この見方が認識されると、1863年は、聖書預言における第六の王国の歴史において、プロテスタント主義の角にも共和主義の角にも、重要な道標となる。

また、わたしは預言者たちによって語り、多くの幻を示し、預言者たちの務めによってたとえを用いた。ホセア書 12:10.